

令和7年度厚生労働科学研究費補助金
(障害者政策総合研究事業)

強度行動障害を有する知的障害・発達障害に関わる医療従事者向け
研修プログラム開発に向けた研究 (24GC1007)
分担研究報告書

分担研究課題名: 「自閉スペクトラム症特性に応じた基本的配慮 (基礎編)」「自閉スペクトラム症特性に応じた構造化の実践」(応用編) 講義資料及び講義ビデオの改訂および用語集の作成

分担研究者: 田中 恭子 (国立病院機構 菊池病院 精神科医)

研究要旨

強度行動障害をもつ人の多くがもつ、自閉スペクトラム症の特有の学習スタイルに基づいた支援である構造化について、基礎編、応用編にわたって講義を行った。応用編では対面でのワークを行い、模擬事例についてストラテジーシートを完成させるにあたり、主として事前の工夫にあたる部分で、どのように構造化を行うかについて実例や写真などを多く用いて説明した。実際には模擬事例のようにうまくいくことは少ないため、その際の再構造化の仕方について、今後検討される必要がある。また、用語集を作成するにあたり、講義内容から重要語句を抽出し、解説を加えた。

A. 研究目的

強度行動障害をもつ人の多くが、重度・最重度の知的発達症と自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder, 以下 ASD) の合併例である。ASD の特有の学習スタイルに応じた支援の一つに構造化がある。本講義では構造化を用いた医療機関における支援の考え方や実践例を紹介する。

令和6年度は基礎編講義をオンラインで、応用編講義を対面で実施した。応用編で行われるワークでは、行動障害をASD特性から考え、どのように構造化するかについて、模擬症例をモデルに解説する。

B. 研究方法

分担研究者の自院での経験などを盛り込み、初学者に適切な内容となるように調整した。

ワークでは応用行動分析の考え方も学んでいくことから、整合性や統一感が保たれるよう配慮した。

(倫理面への配慮)

症例や写真については、個人が特定できる情報は除外して提示した。本人は知的障害があり研究への同意が困難であるため、家族や成年後見人に研修についての説明を文書で行い、書面で同意を得た。本研修を通じて個人が特定される可能性がないように配慮した。

C. 研究結果

1) 自閉スペクトラム症特性に応じた基本的配慮 (基礎編)

講義では構造化の4つの柱(物理的構造化、スケジュール、視覚的構造化、ワークシステム)について、それぞれの理論的背景となるASD特性と、どのように情報や環境を視覚化・具体化するかについて、自験例をもとに概説した。令和6年度は知的障害という用語を知的発達症へ訂正した。

2) 自閉スペクトラム症特性に応じた構造化の実践 (応用編)

対面の講義ではストラテジーシートの作成を通して、行動に対する見方や、支援計画の立て方を学ぶことを目指し、構造化が果たす役割として環境調整について説明した。最後に行動障害の改善だけにとらわれることなく、本人の視点でQOLの向上を目指すべきであることも言及した。令和6年度は知的障害という用語を知的発達症へ訂正した。

3) 用語集の作成

基礎編においては、構造化、物理的構造化、スケジュール、視覚的構造化、ワークシステムの5つを重要語句として挙げ、説明を加えた。これらは構造化の構成要素として重要であり、講義を理解する上で理解が必要である。

応用編においては、インフォーマルアセスメント、個別化、トークンエコノミー、Quality of Life (以下、QOL) の4つについて説明した。特にQOLについては、本人の問題行動だけに注目するのではなく、本人の視点に立ち、QOL向上を最終的なゴールとすべきことを支援者が理解するために重要な概念と考える。

D. 考察

医療機関において構造化を実施していくためには、ASDの学習スタイルの理解、構造化についての知識や技術の習得が必要である。しかし、医療者にはなじみが薄く、実際に取り組むことのイメージが持ちづらいので、少しでも実践につながるように実例などを示したことが役立てればと思う。応用編では、応用行動分析の講義内容とのつながりを保った一つのワークになっているかが懸念されたが、受講者の理解は概ね得られたようであった。実際には講義内容のようにうまくいくことは少ないため、うまくいかなかった場合にはどうするかについて、次年度以降講義内で補っていく方針である。

E. 結論

基礎編・応用編にわたり、医療機関でどのように構造化を用いて、強度行動障害をもつ人を支援する

かについて講義を行った。具体的な事例などを多く紹介し、実践につながるように心がけた。今後、受講者からのフィードバックを得て、さらに内容を検討していく必要がある。

F. 健康危険情報

本研究に関する健康危険情報は無い。

G. 研究発表

1. 論文発表

・田中恭子. 今こそ知ろう, 強度行動障害 強度行動障害概論 強度行動障害への支援—構造化—. 児童青年精神医学とその近接領域 66 (1); 28-36. 2025 年

・田中恭子. 中等度～最重度知的発達症をめぐる精神科臨床 中等度～最重度知的発達症の人たちの精神科入院治療. 精神科治療学 40(12); 1305-1311. 2025 年

2. 学会発表

・田中恭子. 強度行動障害チーム医療研修の現状とこれから「菊池病院における職員研修の課題と発展」第79回国立病院機構総合医学会 2025年11月

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得 なし
2. 実用新案登録 なし
3. その他 なし